様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６０８
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１３１２０

研究課題名（和文）保育環境としての通園バスの特質と機能に関する研究

研究課題名（英文）Characteristics and Functions of School Buses as an Environment for Early Childhood Care and Education

研究代表者
境　愛一郎（SAKAI, AIICHIRO）

共立女子大学・家政学部・准教授

研究者番号：７０７８１３２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、保育環境としての通園バスの特質と機能を明らかにすることである。第一に、車内での観察調査を実施し、子どもの活動内容を分析した。その結果、車内では会話のほか、周囲の環境を用いた独自の遊び、異年齢交流等が生じていることがわかった。また、そうした活動は、運行状況と密接に関連しており、往路と復路とでは、活動内容や展開経路が異なることが明らかとなった。第二に、通園バスに乗務する保育者、運転手へのインタビュー調査を実施し、常務に対する意識や人的環境としての意義を明らかにした。第三に、上記の成果を踏まえた園内研修を開発し、研修参加者に保育の質の向上につながる意識変容が生じたことを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の最大の成果は、通園バスに対して子どもが経験を重ね、人間関係を広げるとともに、保育者が意図的に環境構成等を行う必要のある保育環境としての意義を見出したことである。通園バスは、1950年代頃から導入が進み、私立幼稚園を中心とした多くの保育施設で運行されている。これを利用する子どもは、往復1時間以上の時間を車内で過ごす場合もある。それにも関わらず、通園バスを保育環境の一部と捉え、その性質等に迫る研究は皆無であった。本研究の成果は、園生活や保育環境の枠組みを拡張し、保育の営みを切れ目なく捉える視座をもたらした。また、バスをめぐる保育者や運転手の役割を、安全管理に留まらず検討する必要性を示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to identify the characteristics and functions of Early childhood care and education school buses. First, an observational survey was conducted on the bus to analyze the children's activities. The results showed that in addition to conversation, unique play using the surrounding environment and interaction among different ages occurred on the bus. It was also clear that those activities were closely related to the bus timetable, and that the content and development process of the activities differed between the outbound and inbound routes. Second, an interview survey was conducted with teachers and drivers who work on school buses to clarify their awareness of the regular duties and its significance as a human environment. Third, we developed an in-school training program based on these results and confirmed that the participants experienced a change in attitude that led to an improvement in the quality of ECCE.

研究分野：保育・幼児教育学

キーワード：通園バス　保育環境　バス運転手　保育者　園内研修　子どもの遊び　園生活

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

私立幼稚園をはじめとした保育施設には、専用のバス（以下、通園バス）を利用して子どもの送迎を行うものが少なくない。こうした通園バスは、高度成長期頃に、通園時の子どもの安全を確保するなどの目的から、都市部を中心に急速に普及した（多田 1961）。少子化・都市化が進行した今日では、広域から園児を募ると同時に、保護者の送迎にかかる負担を軽減するサービスとして、施設の運営を維持する重要な手段の一つともなっている（八幡 1999）。通園バスを用いた送迎は、諸外国においても見られ、とりわけ米国では、全幼児・児童・生徒の半数以上がバス通園・通学を行うなど、地方に住む子どもの主要な交通手段となっている（文部科学省 2008）。

通園バスを利用する子どもの多くは、片道 40 分、往復で 1 時間半近くを車内で過ごす（西村 2012）。これは、屋外遊びの平均時間（赤木 2010）とほぼ同値である。すなわち、通園バスを利用する子どもは、園庭や保育室のような主要な保育環境で過ごす時間と同じだけの時間を車内で、乗り合わせた他児や保育者とともに過ごすことになる。先述した通園バスが欠かせない保育の実情も加味するならば、通園バスとは、子どもが毎日多くの時間を過ごし、種々の経験を重ねる保育環境であると認識する必要がある。

保育環境としての通園バスの特徴に関しては、クラスや年齢の枠を超えた交流の場となる（河野 1990）、交通マナーや地域に触れる機会となる（菊池 2015）、簡単な遊びが展開できる（浅野 2004）などが指摘される。また、通園バスに対する園の意識や運用上の課題（西村 2012）や、乗務中の保育者の援助（浅野 2004）に言及した研究も見られる。しかしながら、これらの研究は、保護者や園への質問紙調査あるいは限定的な観察に基づいており、実際に車内で過ごす子どもや保育者などに焦点を当て、彼らの行為や経験の意味や変容、通園バスという環境の特性等を明らかにしているとは言い難い。

前述の通り、通園バスは、単なる交通手段として軽んじることのできない保育環境である。したがって、そのなかで、子どもたちがどのように生活・活動を展開し、人間関係を構築しているのか、また、乗務に当たる保育者などが、どのようにそれらに関わっているかなどを検討し、保育環境としての通園バスの特質と機能の具体に迫ることができれば、保育における子どもの生活や経験をより連続的・総合的に捉え、その質の理解や向上に寄与し得ると考える。

２．研究の目的

本研究の目的は、保育環境としての通園バスの特質と機能について、実際にバスを利用する子どもの観察と乗務にあたる保育者や運転手などへのインタビュー調査によって、複合的に明らかにすることである。具体的には、以下の研究１から研究３により、車内での子どもの姿と子どもを取り巻く人的環境の性質とを合わせて環境の特質と機能を描出する。加えて、以上の成果を踏まえ、車内での保育の向上に資する園内研修を開発する（研究４）。

研究１：通園バス内での観察調査に基づき、車内で子どもが展開する活動の種類とそれらを成立させる車内の環境や人間関係の特徴について明らかにする。
研究２：通園バスに乗務する保育者を対象にインタビュー調査を実施し、車内の人的環境としての保育者の役割や性質を明らかにする。
研究３：通園バスに乗務する運転手にインタビューを実施し、乗務に対する意識や子どもとのかかわりの内容など、人的環境として役割や性質を明らかにする。
研究４：以上の成果を踏まえ、車内での保育の質を向上させるための園内研修を開発する。

３．研究の方法

（１）研究１について

研究協力園の通園バスに同乗し、往復合わせて 22 日間の観察調査を実施した。このうち往路での観察日数は 14 日、復路での観察日数は 8 日である。保護者の乗車による予備座席数の不足などから、日程に多少の開きが生じたが、概ね往路は月 2 回、復路は月 1 回の頻度で観察を行った。観察を通して、往路 70 件、復路 44 件の子どもの活動等に関するエピソードが得られた。これらを質的データ分析法（佐藤，2008）によって分析し、内容ごとに整理した。

（２）研究２について

通園バスに乗務する保育者を対象とするグループインタビューを実施した。グループは、バスの乗務経験年数に留意し、乗務の初心者・中堅・ベテランの 3 名で構成する。インタビューでは、語りを促進する刺激と自園との比較対象を兼ねて、研究１の結果を提示するとともに、自園における乗務時の留意点や子どもとのかかわりの様子について質問を行う。これらのインタビューデータを、質的研究法の SCAT（大谷 2019）を用いて分析した。

（３）研究３について

2019 年 7 月、バス運転手 5 名に対して乗務中の意識、印象的なエピソード等について訊ねる

インタビュー調査を実施した。以上のデータを SCAT（大谷 2019）によって分析した。

（４）研究４について
　研究２から転じる形で、計画途中に生じた研究である。保育現場と協働で「子どもも保育者も乗りたいバスづくり」をテーマとする通園バス乗務者を対象とした園内研修を設計し、2021 年度、2022 年度にわたって試行した。各年度の研修が終了した段階で、参加者 5 名に対して研修と一年間の実践の振り返りを目的としたグループインタビューを実施した。インタビューデータは、質的データ分析法（佐藤, 2008）によって分析した。

４．研究成果
（１）研究１について
　往路と復路を合わせて 114 件のエピソードから子どもの活動を抽出、活動の内容や構成人数などを整理したうえで、バスの運行時刻表上に配置し、活動の発生状況の傾向や内容的特徴を分析した。結果として、バス内での子どもの活動は大きく 5 種類（「日常会話」「モノと関わる活動」「モノを介する活動」「言葉・動作を介する活動」「その他」）に整理できるとともに、それらの傾向や特徴については、往路・復路ともに運行時刻表と密な関連性が見られることがわかった。例として、出発から次第に乗車人数が増えていく往路では、コースの序盤は保育者主導の比較的小規模な活動が中心であるが、その後子どもの人数に比例するように多人数かつ動的な活動が生起し、内容的には園生活の文脈に近づいていた。一方で、人数が反対の方向に変化する復路では、出発直後の異年齢クラスにおける集会のような状況から、保育者と後半に後者する子ども数名による家庭的な場へと移行していく傾向が見出された。
　最終的に、保育環境としての通園バスの特質として、活動が段階的に発展あるいは不可避的に解体される、家や園さらに地域の文化が交流すること、運行に伴って場の様相がグラデーションのように変容すること、活動が座席の位置や制約に依存すること、の 4 点が明らかとなった。加えて、通園バスは単なる移動手段に留まらず、子どもが多用な人間関係や文化を経験する場、家と園の間の生活文脈的な移行を支援する場としての機能を有することが示唆された。

（２）研究２について
　インタビューに基づき、通園バス乗務者を対象とする園内研修を開発した。（研究４へ派生）

（３）研究３について
　インタビューを通して、通園バスの運転手らは安全運転への意識を常に割き、保護者や地域との信頼関係を構築しようとしていること、子どもや車内で保育者が行う保育行為の特性を分析し、それらに応じた運転を行っていることなどが明らかとなった。また、運転関連職のセカンドキャリアとして選択されることが多いため、経験豊富な年長者として保育者の業務をリードする場合があることがわかった。こうした傾向は、勤続年数の長い正規職員で顕著であったことから、園への帰属意識が高まる状況において、運転手はより積極的に子ども・保護者と関わり、若手保育者への指導や組織内での主体的判断が可能になると考えられる。他方、そうでない運転手が子どもや保護者に対して無関心であるということは認められず、むしろ、子どもの素朴な面白さや有能さに敏感である可能性が示唆された。

（４）研究４について
　表１のような園内研修計画を開発した。研修の主たる特徴は次の通りである。第一に、バス車内での子ども・保育者による活動を保育であると考え、その質的な向上を目的に置いていることである。第二に、実践上の工夫や印象的な事例を写真等に記録し、講師・参加者間で批評し合うカンファレンスや事例研究会の形態を軸としていることである。第三に、月１回の頻度で通年開催する継続的な活動として計画したことである。第四に、講師や管理職による指示・指導ではなく、参加者による主体的な試行錯誤を重視する「協働型園内研修」を基本とすることである。第五に、研修の初期段階で、各種調査や他園の安全マニュアルなど、通園バスを俯瞰的に捉えるための情報提供を行っていることである。
　研修参加者へのインタビュー調査では、通園バスの乗務が研修対象に設定すること自体が、乗務する保育者の意欲を高め、教材開発などの試行錯誤を促進する可能性があることが明らかとなった。この背景には、バス乗務が、周辺的な業務として組織内で軽視されていたことがあると考えられる。さらに、バスと園舎での子どもの生活の連続性に対する関心、保育者間の連携の必要性に対する認識を高め、園における「保育」の領域を拡張し得ることもわかった。他方で、バス乗務者が担任を兼務する場合には、十分な研修時間の確保が難しいといった、実施上の課題も指摘された。

表１　2021 年度の園内研修の実施時期と内容

	実施時期	研修内容
第１回	2021 年 6 月	通園バスの実態に関するクイズと保育環境としての特性を考える
第２回	2021 年 7 月	乗務における悩み相談と今後の方向性の検討
第３回	2021 年 8 月	一学期の振り返りと今後の展望についての語り合い
第４回	2021 年 10 月	第一著者が各バスに乗車する公開保育
第５回	2021 年 11 月	事例研究後の実践報告
第６回	2022 年 1 月	他園の園長・保育者を招いての研究報告

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 境愛一郎・濱名潔・金岡樹里	４．巻 69
２．論文標題 通園バス内の保育の向上を目指した園内研修の試み	５．発行年 2023年
３．雑誌名 共立女子大学家政学部紀要	６．最初と最後の頁 85-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 境愛一郎	４．巻 68
２．論文標題 通園バスに乗務する運転手の諸意識と保育施設における役割	５．発行年 2022年
３．雑誌名 共立女子大学家政学部紀要	６．最初と最後の頁 97-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 境愛一郎	４．巻 29
２．論文標題 保育環境としての通園バスの特質と機能 ： 車内での活動内容と運行時刻表との関連性に着目して	５．発行年 2020年
３．雑誌名 乳幼児教育学研究	６．最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 境 愛一郎	４．巻 127
２．論文標題 通園バスの人的環境に関する研究：非保育者添乗員の乗務意識と役割に着目して	５．発行年 2018年
３．雑誌名 宮城學院女子大學研究論文集	６．最初と最後の頁 1～20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20641/00000417	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 境愛一郎	4．巻 56(3)
2．論文標題 通園バスに対する保育者の認識と保育環境としての可能性	5．発行年 2018年
3．雑誌名 保育学研究	6．最初と最後の頁 92-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20617/reccej.56.3_92	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 境愛一郎
2．発表標題 One form of cross-occupation collaboration in Japanese kindergartens: The role and consciousness of school bus drivers
3．学会等名 PECERA2021（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 境愛一郎
2．発表標題 通園バスは子どもにとってどのような場所であるのか
3．学会等名 日本保育学会第72回大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 境愛一郎
2．発表標題 帰りの通園バスは子どもにとってどのような場所であるか
3．学会等名 日本子ども社会学会第26回大会
4．発表年 2019年

１．発表者名 境愛一郎
２．発表標題 Relevance of Kindergarten School Bus Route Schedules and Children's Activities
３．学会等名 PECERA2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 境愛一郎
２．発表標題 人的環境としての通園バス運転手の役割と専門性
３．学会等名 日本保育学会第73回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 境愛一郎
２．発表標題 通園バス車内での子どもの活動に関する質的研究
３．学会等名 日本子ども社会学会第25回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 境愛一郎
２．発表標題 Diversity and tendency of children's activities on kindergarten school buses
３．学会等名 The 17th Annual Hawaii International Conference on Education（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関